

神仏用の枝物生産

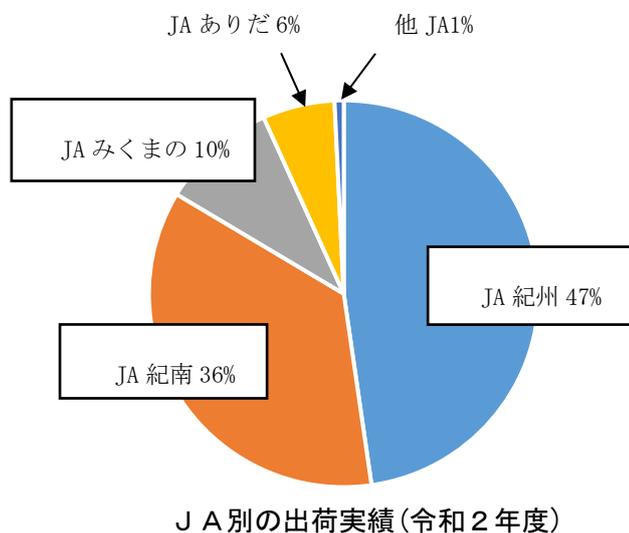
J Aグループ和歌山農業振興センター 技術参与 本田孝志



【はじめに】

サカキ・シキミ・ビシャコ等の神仏用枝物は市場や直売所で根強い人気がありますが、高齢化により生産量は減少傾向となっています。令和2年度におけるこの3品目の県農取り扱い額は1億4,800万円で、JA紀州とJA紀南が中心となっています。品目別には、サカキが7,200万円、シキミが4,500万円、ビシャコが3,100万円となっています。

今回はこれら品目の生産状況や栽培のポイントについて簡単に紹介したいと思います。



【サカキ】

ツバキ科の常緑樹で本州の温暖な地域に広く生育しています。ヒノキの林間など直射日光が当たらず、適度に明るい場所が適地です。

中国からの輸入が多く、国産割合は27%です。本県の生産額は全国一で国産の40%を占めています。

＜育苗＞11月または3月に播種すると5月頃に発芽します。70%程度の遮光下で挿し木を行うこともできます。

＜定植＞2～3年生の苗を春か秋に、株間1.5～2m程度で定植します。定植時に緩効性肥料を少量施用しておきます。作業性を考え、樹高は2.5m程度で止めます。定植後5年ころから収穫可能となります。

＜病虫害＞病気では輪紋葉枯病などが発生することがあるので、樹木類に登録のあるベンレート水和剤等で防除します。害虫ではサカキブチヒメヨコバイが発生することがあるので、ダイリーグ粒剤などで防除します。



サカキ技術研修会、林業試験場職員が説明

【シキミ】

シキミ科の常緑樹で比較的日当たりの良い場所で生育が良い。植物全体に有毒成分を含んでいます。山どりもあるが栽培している圃場も多いです。

〈育苗〉11月または3月に播種します。春に挿し木で増やすこともできます。

〈定植〉2～3年生の苗を春または秋に定植します。株間は1.0×1.5m程度とし、緩効性肥料を少し施用しておきます。定植3年後に主幹を収穫した後、側枝を横に伸ばし低樹高で栽培します。

〈病虫害〉病気では輪紋葉枯病やタンソ病に注意します。農薬による防除に加え、枝が込みすぎて風通しが悪くならないように注意します。害虫ではアブラムシやシキミグンバイなどに注意します。



シキミ栽培状況（古座川町）

【ビシャコ】

ツバキ科の常緑樹で広く自生しています。比較的日当たりが良く排水性の良い場所が適しています。西日本では仏前で使いますが、関東以北では神事に用います。

〈育苗〉11月または3月に播種すると5月頃に発芽します。その年の秋または翌年の春に移植を行い

株を大きくします。

〈定植〉出芽前の3月または10月頃に株間1m程度に定植します。緩効性肥料を少し施用しておきます。大きな苗を用いると定植後2年程度で収穫できるようになります。

〈病虫害〉病気では輪紋葉枯病やタンソ病に注意し、ベンレート等の農薬で防除します。

害虫被害はあまり多くありませんが、幼虫が葉を食害するミノガやチャハマキ等に注意します。



ビシャコは西日本で仏花として人気が高い

【高野槇】

マキ科の針葉樹で日本の固有種です。紀伊半島、四国、木曾の山地に多く生育しています。真言宗を信仰する地域での利用が中心でしたが、長持ちする特性が好まれ、近年は西日本で広く利用されるようになっていきます。

〈育苗〉3月に播種すると9月頃に発芽します。初期生育が遅いので苗づくりに5年程度要します。挿し木も可能ですが、発根まで長い期間が必要です。

〈定植〉春または秋の低温期に株間2～3m程度に定植します。定植後1～2年はあまり大きくなりませんが、その後は成長が早くなります。病虫害の発生は少ないですが、気温や湿度の高い地域で

はチャアナタケモドキによる枝枯に注意し、枯れ枝は速やかに除去するようにします。

【まとめ】

神仏用枝物は高齢化により生産量が減少しており、今後も安定価格で取引されるものと思います。管理の手間が少なく、鳥獣害の被害も少ないため、中山間地域の産物として今後も維持拡大を図りたいものです。

栽培する場合、いずれの品目も排水性の良い場所に植えることがポイントです。また、ヒノキ林間に適したサカキ、寒さに強い高野槇など、品目特性を生かして栽培に取り組みたいものです。